

重修真書太閤記
二編
四

13
459
14



13 特
 門 5
 號 459
 卷 14

消福乘

重修真書太閤記二編卷之十

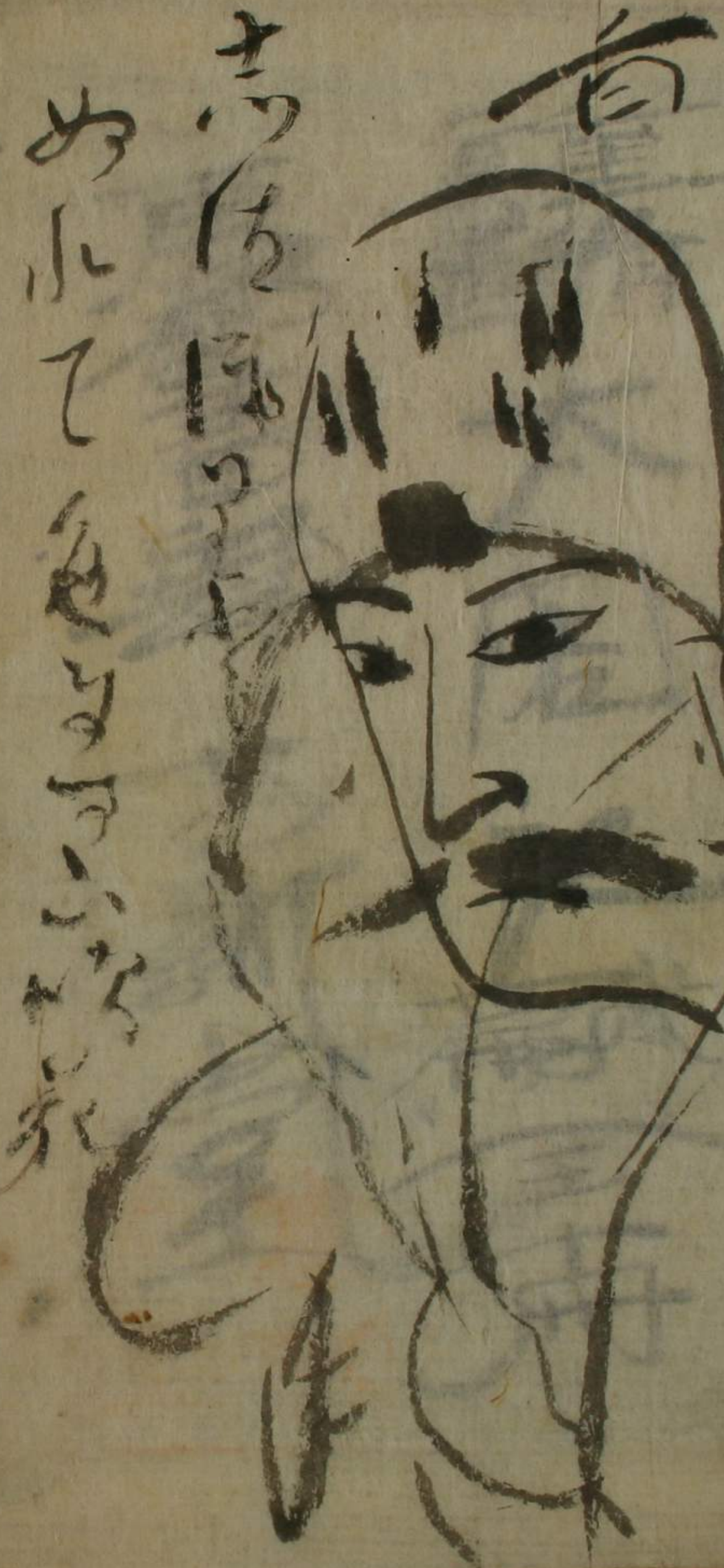
大澤次郎左衛門織田家小屬と事
 并信長大澤が降參と疑ひ拒む事

同政會印

藤吉郎秀吉墨股に若乃要害と築き獲たりし因
 り兼約の如く城主となり組下與力都合二千七百餘人
 りて楯籠りしに齊藤勢追て攻来るとしども秀吉
 智謀を以て切勝武威を振い近隣の諸士と歸伏せし
 めんとし或工夫しけるが爰に美濃各務郡鶉沼乃城主
 大澤次郎左衛門の藤吉郎組下大澤主水が兄あり
 齊藤家の為に忠勤を盡ししはとも義龍早世の後

大澤次郎左衛門

柳菴栗原氏校訂



龍興暗弱りくじやくしし忠臣ちゆうしんの諫いさなを從したがひ旗下はたかの諸士しよしに禮れい義ぎと失ない道三だうさん以來いらいの規則きぎよくを亂みだししけつしを憤いらいり龍興りくきやうが使者しやしや來きりて軍役ぐんやくを催促さんそくせししも一度いちども出會いは只ただ引籠ひきこもアアて有あつる由よしと例れいの間者まへ等らより連つれ注進ちゆうしんししれは藤吉郎とうきちらうすすかからち主水しゆすいと呼出よびだし貴方きかたの舍兄しやきやう次郎じらう左門さもん齊藤さいとうが無禮むらいと憎にくみ此程このほど引籠ひきこもり居ゐる由よし慥たつたと聞きり左ああら龍興りくきやう定さだめめる軍兵ぐんべいと差向さむかるああらん早はやく鶺鴒うめま沼ぬま小行せうかう向むかひ舍兄しやきやうと勸すすめて當方あつちへ與力よりきたたるここゝむべべし若然わかにらば兄弟けいだい一味いまいして良王りやうわうの仕つかへ志こころざしと青雲せいうんと騰あるると云いへべし龍興りくきやうが如ごときは亡國かうこく乃將なうしやうあり是これと消息しよくしと共ともみみて何なにの益えき有あると教訓けうくんせせししふ元もとより主水しゆすいとめ意いあるを

以もて一儀いつぎも及およばば即刻きつこく鶺鴒うめま沼ぬまに到いたり兄次郎けいじらう左衛門さゑもんと對面たいめんししやけつしは墨股すみまたより鶺鴒うめま沼ぬまままぎぎ行程こうてい六里りく小遠せうえんし墨股すみまた牛牧柳色うしむかやなぎいろ別府べつぷ河渡かたわを過すぎぎ墨股すみまた川がはと渡わたり藪田やぶた六条りくじやう加納かの瑞龍寺ずいりゆうじ繩手じゆで各務野かむのと鶺鴒うめま沼ぬまあり俗ぞくににるる處ところといいふ某先年たがね義龍ぎりゆうに頼たのみ織田家おだけを聞きかんんとあある尾州おしぢうに立越たこしてを求もとめめる仕官し官に能よく大將たいしやう信長しんぢやうの器量きりやうかかららび家中うちぢやうの仕置しぢぢを見聞けんせせるる大將たいしやう寛仁かんにんにて大度たいどありその臣下しんげににも誠忠まことぢゆう無な二ふたとて君きみを補佐ほさは中ちゆうに就つく木下藤吉郎きのしたとうきちらう智ちあり勇ゆうありその心中しんちゆう我等われらが勿なく及およば處ところにああらば某年たがね來きるの苦辛くしんと一いっ眼がん小看せうかん破やれれ久ひさしし

大関記二編卷一

重恩を被られ終ふその仁慈の絆を脱とあつて今ハ
赤心成明して主従の約をあたふに至り朝夕その容儀
を窺ひこころよ天の縦をる良將の器とおめりさころ
あり行末憑をると云ぶさとの形り齊藤元これ我
等が累代の主君と云ふはあはれども道三入道よく
士を指揮する道を知り土岐家の衰へる仕置と立
直しゆるによりて闔國を我りて其幕下り従ひ
の義龍無道なれども武士の業小長れを我等も
その軍配よ就く働さる形り然るよ今の龍興が身の
愚あるをと思はる譜代相傳の家僕と同じく進退を
とたふ顔乃憎さ誰ら良と言ふのあらん且龍興驕り

く身を省みぬ終るる國を失ひるんぞ信長いふれと
同一や能を尚び士を愛しあはれ近きは益その徳よ
従い遠きを弥々の風を慕ふる軍を向る處勝むと
云ふ形く危きよ似く危かれば天の授くる弓矢取ら鳴
海あり義元を討はるるて思いよその上此頃墨股の要
害を築さる全く美濃を切取ん計策あるぞ然美濃
を信長の國とおめいよあべり亡びかや齊藤家の旗
下にありて天の興をる信長と取合ふん薪を負く焼
原を過石を懐く淵は入小等龍興は従て家滅一玉
らん先祖への不孝第一とやべり早く織田家の一味
同心なりあて家門の繁昌を祈るあへり利害細

やうに説たりしを次郎左衛門も兼く尾州へ参向して
身の安危を定めなやと思ひ居りし処ふれが我元より
當國乃政事もさうりかしく諸民困窮の有さぬと見
るよ齋藤家の亡びんを遠くらど如何ありしや
家督の安堵を計らんと思案して此項引籠り居る
但某一人か思ふあはる竹中半兵衛尉もこの丁後
閑居して世の事小立交らざる由を聞き定めて某と
同し心と知しよりその外諸士心中は皆左こそ思ふめ
御邊が言葉の如くあはる何様當國は織田殿の領
なるべし早く我意を彼殿に告ぐ可然計らひしと
やけるあはる主水大悦び然し某先立歸り宜く披露

とて約束して墨股小馳返り木下より始終を語り
しを木下大悦び貴方の誘引もあはる舎兄もいと
ふらや納得すし能も仕負せらるしものかな
それよ付く某又一の立夫あり貴方れ舎兄は竹中半兵衛
尉と無二の懇志と聞き如何おもして竹中を當方の一味
と扱きたきものとは是は貴方の舎兄乃力を假べし能竹中
を誘引するは是は過る大功又あるは但次郎左
衛門尉當城まき来りよ某同道して清洲は参上
し織田殿の見参入べし其上は立夫のともあれしをこれ
後の事あり今一度鵜沼は行く竹中のとを舎兄は勸
めあはるとありけるは主水再度鵜沼はいり舎兄

次郎左衛門尉はヤククハ織田殿一味のト木下藤吉郎
 よく心得く同道一清洲に至りて織田殿に見参の式
 すぐく落かく取賄か雇いとつりちやく墨股小趣さ
 藤吉郎は面會なりあべい舎兄の親しく形あふ竹中
 も木下乃智謀武勇も及あまどあらのこふくば木下
 よく人と愛しその組下を憐れむと慙むと近國又あ
 へいさ英雄なり彼等心成一致みく信長と補佐する
 かうい虎は翼を添るが如く舎兄も早く見参の用意
 かへ玉へ直は同道ヤさんと勧めくバ次郎左衛門尉
 少しも辭をば然バ直小参向とて主水と共に
 打連く墨股の城中に來る主水まげ入る木下小助くと

通一々れば秀吉出迎へ次郎左衛門尉と客坐小請り
 勤の禮をふく貴邊乃舎弟主水久しく織田家
 近せらるる故大將も深く貴邊の武勇を聞知日比
 渴望あり満ち然る小今爰追來臨乃條某が大慶何
 事り是る過つる是より清洲は伴ひヤさんと先孟と
 出さへはく饗應しけるあを次郎左衛門尉の丁
 寧なる振舞を感し心中大に悦い某齊藤家の旗下
 ぞくくその家乃危あさぞと見く心と變ト爰來る
 臆病ふる小似くくも國亂を民困窮天誅既
 至んとするを鑒きて亂を去治る從い困窮と遁
 きて安穩小就心中實は百姓と救らんが為なれば全く

一身の苦樂とてなる計ふあはば織田殿の能人と愛
民と哀とを由と承り年来慕く存けひ
ほる処り弟主水出格の慈恩と蒙り御幕下小伺候
仕る上ハ兄弟一胞の好何ぞ各別の志を立けんや同
トく御旗下は屬し誠忠と盡さん為よ參向仕りては
宜しく御肝煎頼り奉る由答へしにより藤吉郎益悦
び早く清洲へ伴ひやさんとく淺野弥兵衛尉長政と
墨股の留守居とぬ大澤と打連て清洲へ參勤し
濃州乃大澤次郎左衛尉御旗下に參上の由と言上信長
聞召く大澤と美濃國の名家といひ勇士形り義龍の
とめよ某と謀りしもの俄に降參心許なりや上

齊藤家今既亡むんとすつと見え心を變トける
臆病の至り何れをせよ實の降參してはよも何れと
散く不快の躰ありされ藤吉郎案小相違し大澤事
美濃侍降參乃とめりてゆへ隨分御賞翫あり然
るべくは然りと左様の御疑近比憚入ゆ中条よりども
曲く御目見と許し玉い様とちけりふより止むを
得ば見參と許しあひの信長木下に宣ひたり
ハ大澤事別思召子細あれは速小腹と切とへしと
ありけりふより藤吉郎重て中様美濃國と打捕んと
思召付きゆは付墨股の砦も仰付られ某と城主
ふりあ入り専ら美濃の諸士と計策いさせよの御意

ありしにありまが大澤を誘引してては切腹させ
よとの御説何とも心得なくいと詞を盡して中
けきども信長更許し玉とば藤吉郎大に迷惑し
これを殺したんあち此後降参の侍有まどとせり
いづあち為づまが墨股を歸りて鬼も角も謀るべし
とて大澤と共に清洲と發足しけり

印本太閤記に墨股の城主とありし年に大澤と降
参とをその十二月十日小信長公へ注進しその翌年
正月五日木下大澤と同道し清洲へ御礼やる
よ信長大澤を生害させよと仰られしにより木下
再三中上るといふも御許容なりしに宿に歸り

大澤と呼寄りそふやけるは汝が身の上り聊心許
あきとあり我と質うと退ゆとて九腰ふありて
やされしを大澤心を剛ちれ共道と志る孫を脇指
と心りしにありあてその夜退よと記せり

木下仁智大澤を助くる事
并木下竹中が閑居と訪事

木下大澤次郎左衛門尉城降参せしめ清洲と同道
しけき信長も賞翫あるべしとありしの外切腹を
よとありしに如何ある故とも思ひ解由なく様々諫
めを容ると云ども一圓聞入をせしむるにより詮方なく
大澤を召具し墨股よかへり木下大小刀を解し

あつバ木下殿の御誤と形りぬべし命を義に依りて輕
 しと申事ゆゆやといひゆり又も切腹せんを存し多
 とし木下ことと諫め無事の工夫を廻りけり
 忽ち一の謀と案ト出し再び大澤小向く申様士の剛
 臆と競つと今小始めぬと形り御邊腹切て剛勇
 の志と立ちあふ處り某何と存命して怯弱の笑と
 取べんや然ら我と存命と様なりあつて武士
 二人犬死せんともおのり惜きことあつて申や御邊の
 疑とくくこハ武勇等輩小超つる故あり織田殿
 これとおしと思はせあふの餘りなると信實歸伏乃
 驗とあつて誠を盡しあふ上りつバ賞翫もあつ

他よまさういなる萬卒ハ得安く一將ハ得ぢり
 織田殿かひ竹中半兵衛尉の智謀つらきこと成慕
 くれ是を味方と招らんことを望むる幸我殿と重治
 ぬしと入魂のよしを聞及つるや竹中が閑居は赴
 さまみく此人を勧く清洲へ参るやうにかゝるは
 足下乃大功となり疑心と解媒とあるのこ形は却て
 抽賞あるべき形りなり左あんよ某も我殿も犬死の
 災と轉ト恩賞の幸と得べけれども竹中を勧め尾
 州は従はるるとたやまらる酒がまが某もその不交を
 ずり彼處より三寸此舌をりゆり彼人乃心底成
 動り置べしその跡へ御邊行むらいて斯ことあつらひ

ふらふかのむと止を得を一度、清洲へ赴くべし。明日を
某の地へ赴きて此策を行へしとや。あはれ大澤大は悦
び心中に木下の智慮と感し不測の名人うると且賞し
且褒もせしや。ふその計は従ひたり。叔藤吉郎は浪人の
躰小なり。武者修行の者あはれの様は出立て栗原山乃
奥ある竹中が閑居は立寄まはれ案内とふし一夜の
宿を求めけり

栗原山といふは美濃不破郡小あり。墨股より西
南にあはれ行程三里餘と知る。上古中臣栗原
連の出し處なり。折ふ人もあはれし。や半兵衛自身出来り木下が

容儀骨法よりその出立をほりくと打詠むる。刀劍
と帯て旅装せり定め。武術修行の人あるべし。某を
髪すりたがはれ。世と通じて閑居の身なり。饗應
とべし。儲のあはれと。はれ。今宵の宿をせし。参らせん
内へ入る。木下大はよろこぶ。武士の形か。ら
雲水は身とまはれ。諸國修行の身なり。何を厭ひ
や。べし。とて内よ入。重治小童を呼び茶を點。進め
し。木下この御室の志。凡あはれ。存はれ。某諸國
と廻り兵法と修練せん。成願ひし。微運ありて
良師は逢はれ。今主人の躰を伺はれ。文武の道は堪む
ふ。と見受たり。某が修行の志と哀し。弟子の列は

加えむい教導の力を惜みむくは某が本懐
 よはとやを聞き重治莞爾と打笑ひ我世の塵を避
 く爰ふかくれすめども何ぞ文武の道を知べしや元より
 人を教ふる器はわらふ福を弟子といふも取しをわ
 かつ御邊何故ふ良師と擇びぬぞと問ば木下良師
 よ就く修行し學なりてのち明主を仕えんが為なり
 と答ふ重治明主自ら擇て知べし學自ら勉て成べし
 何ぞ人の差圖ふよるべしやと云木下聞より座を起
 る一禮し賢者の一言千金も替がごとく只今の教訓
 こそ心魂は徹して覺ゆるれ抑當時諸國は合戦やむ
 時をく四海麻のごとく亂とくゆべしども智謀の士ありて

英雄の大將と助けむくは天下その風と慕ひあるは小
 附従とんと大早は雨と望むが如くゆべし然るは先生
 草菴は閑籠り世の動静を心とねしむくはるるといふは
 我やゆるる世をも治め民をも鎮むべき英雄の大將も
 求めむくはるるをがねしむくはるる某短材愚蒙
 の小人かぎり朝暮ふこれと思へばおのこをこれる世乃
 治り多くの國人の安らふその業を勤めん時といひ
 乃ほごふやとまら願ふより外別の心もねしこのやむ
 世人の取沙汰を聞き織田の信長といひは智勇兼備
 して士と愛し民をわらふとあふと尋常ありはるる
 かや一定天下を切従へるはるる良將ありといふはるる多

先生ハ近き隣國ニ住まへばその實を知らざるべし
某がためいささか語らせりやと云は竹中忽顔の色
と替聲を荒げしを思もよめぬと聞えり諸國修行の武士といふを偽りて汝ハ織田家の田者
あるべしと云ふ方便を以て我を勸めて織田家へ
従せんとすなれば三寸の舌を震とも大丈夫の志うご
めと云ふるはるる大磐石の如く無益の言葉を費え
よりと云く歸り去る隙に災なちまらるる身
及びるんと云はば木下も竹中が明察と感へ今ハ何
と云隠しやと云某を尾張侍ありて織田家れらるる
先生何と云てやと云を知らぬと云は竹中微笑す

我貴邊の素性と知むるも尾州小猿面の小冠者
ありて能軍の機變を知りて聞えり今貴邊と
見ると必定人乃噂するは違はるる又良主を我り尋
信長と云はるる治世の君と云はるるや否を我り評せしむ
よ小戦國游説の客乃常ありといふ藤吉郎膝を進
め先生既よ某が説客と云ふを或知ぬと云何ぞ其旨趣
を聞えりて輕く追立ぬと云はるる竹中いさ
我閑散の身と云て世に交るる情ありと云はるる何は招
るるも二度此閑室と出んことをおぼしめされ説客
の利害を向く益なり故は速に去るは是の如く
信長と美濃國の敵あり敵國の士を一人取りとも殺

そを以て國への忠と爲されども道世我身あるが又殺
と成善とせば故うその命を助く再び詞を發せしこと
ふくれといふ木下又信長を當國の敵といへるは
抑當國を何人の國と思はれりや土岐家累代守護の
國なるをどと土岐家と遺恨なりたが齊藤義龍の
信長の舅なる道三入道と弑さしりしことを仇と思
おもはるるのよし然るを先生と信長と敵と斥めり
や今齊藤家のつめは忠を盡さばんとすや今の龍興
主とい善とおひいふふ又惡といはるる善と思ひ
ぬるるなむや補佐の力をばくさせるはむしてこそ
道三のふをまて惡と見極めり故道三義龍のつめ

よ今の龍興を諫められく匡救の徳を施しあふべきに
左も形はぬいふあぞや民の困窮をわたりて
國の滅亡とよそ見ぬや齊藤家の忠臣といふべき
あはばさて先生乃御志いふも不審はゆるし忠は似
る忠にあはざる義は似る義は似る某織田家の侍る
を以て龍興のつめ殺害せしむといふ何ぞ眼前
の墨股小多く尾州侍の籠るをば棄置あふぞや
龍興はその心弱あはる良將の器はあはる國人叛さ
百姓離と遠くは天誅を蒙りその國を失ふべし先生
齊藤家の忠臣といふいふも若年乃龍興をたすけ
國を持堅めあふべきに大厦の傾く一木の支ある處は

あつば大國の亡むんとする一人の力小興はあつばと
おのひまが故よこの閑居は閑籠りよみあるべけれ
ごも國を先祖累代の相傳なり近く道三義龍の好
と日と同くして云べうは齋藤家と共に先生乃家
と滅がくあんなのいと押さふをかりをうりては
某が心うおのふ處をほくそとあをうこよまを答め
あふあふと理を碎きてぞ述ふなり

重修真書太閤記二編卷之十 終

重修真書太閤記二篇卷之十一

木下藤吉郎竹中半兵衛問答の事

并竹中帰伏齋藤家由来の事

竹中重治木下が詞を聞き聊猶豫の躰なりより更ぬ
屈たる色なく嘲笑ひ貴邊を實小説客あり弁者
能も左様と理を付られり何さぬ柔弱佞諛の輩
ハ利口小欺の迷ふともあるべし鉄石心の大丈夫
夫らんとおの詞み動のさるべしや武士の道ハ義
を守る強きもの本意とほ我元來齋藤家人みあり
杯ども數代當國ふ住し彼家の旗下たり織田家と

之聊乃由緒毛なく又豪髪之恩義もなき當代の龍
 興暗愚蒙昧の性をうぐり齋藤家嫡つるとい論を
 こそを棄ると義みあらず義を失ふころ某信長も
 属をも何の用ふる処りあらん然る暗愚蒙昧の
 主を助け無道を誘ふる有道よ赴りしむべきと忠
 義ふ叶ふ処るぐり用ひらざるを知つ諫むる
 毛又愚昧の甚敷ありあるひと暗愚蒙昧の主を廢
 一賢明の良主を立るとまを輔佐するると國のよめ
 と云べあれども龍興より外に齋藤の支族なき因
 り彼家衰へ運極ると滅をべき時いつくる我知て
 我家をすくこの乃閑居る退身せしと存亡をももふ

意めく更ふ旗頭旗下の義を害ふ処ると云
 人間の盛衰禍福定まりたる満ちる闕る天道乃自
 然なり誰を恨む孰を悲しむべらん我心も既に
 決まり利害乃甘言聞べし処ふあはれと云は木下大
 公笑ひ竹中主に當代の賢者ありて智仁勇兼備の
 士と沙汰ありし今見承りて我の心腹を聞か
 尋常の平士だも肩とせあるとらるあり何ぞ智仁
 勇兼備と稱せし實も百聞は一見如きとかや
 かみてありしと黒白の相違ふ頼母にけり人我
 と嘲りかば竹中怒れる顔色よく尋常の平士も
 肩とせある処ふして取らぬ足ぬ義ありとい何故ぞ今

世を遁れ川を某るねども是は肉身を轉さぬも
 過當の無禮の免れはと憤る木下かたねく叔毛く
 御邊多ど乃侍みして此式の理り迷ひあつと更
 心得がし抑御邊齊藤家數代の幕下たるの由
 そ乃義城守りあつとの事ありくつ僻ことあり龍
 興の祖父道三入道と云はれおれ齊藤家の新参
 の士めく齊藤一族の因縁は主君乃家國を押領
 て齊藤の名字を冒すと誰りて疾まざるべし足
 下齊藤家への義を立んとわりのひるも道三を誅し齊
 藤の一族を取立らるべしさりさへなく却て道三に従ひ
 不義を輔多しはあはれや然ると今齊藤家への忠義を專

一と申さるる事といふふとや道三は荷擔して本来乃
 齊藤を棄し不義あり不忠あり時宜を知ぬ匹夫の勇
 者の所業あり取ふ足ぬといふ爰の事之治部大輔義龍の
 父道三討つるその家督を奪ひ惡逆を五刑乃
 属三千の中ありて大いなる罪ありといふ理
 を貴邊の知玉にね告るるにさる惡逆人故補佐
 耶しめんと忠めもあはれ義もあはれ偏み姑息苟
 且の人乃行ぬ誰かはあはれはしと云べし義龍
 天の責をうけ早世し今の龍興も其惡風を受継
 めれば國民乘り離れ滅亡遠らるるは其を以て知
 らるる諫をえ入は山林に退くをの義ありとせら

あつことせむく何の心ぞやたつ道三實み齋藤
の血脉ありともその家乃運領と國政亂を實昂よさ
移らんとする期も臨むよきと存亡共こまじらふ
とも何人つあれ賞しつを喜ぶと主従乃禮
と旗頭旗下の會釋を違ふと汝知をわけぬ御邊
ももあつて齋藤とくも開闢より尔降の國主も
あつて志のまじも土岐遠山の両家衰へ國を治む
仁智よく終み齋藤の有とあるとは是國主の器量あ
るよりよふ所なり旗下の面も土岐汝捨る齋藤も従ふ
も國民乃太平を思ふが故と知べし今其齋藤もつ
衰へ義龍惡逆積りて早世し龍興頑愚ぬして政事

亂さつり民世の惡政小苦き歎と哀しむ諺り一夫
恨を合めば百日雨ふらばと況國中の農民幾
万人の恨も汝や早く五風十雨乃世とあり万户平
安汝娛を共み船さしめんと汝計らるるか
左をなく私の意地を立んとて天下に公路を棄
ぬくと万物の靈も所行ぬらば汝智謀武勇を行ふ
処もろりくも世末世乃龜鑑ともなれ但その智勇
も却て世に智勇も妨むらるる時忠とて忠も
あつて義とあつて義も叶はず天の廢棄もる処
を補げんとて汚名汝蒙り武もなく勇も弱く徒
も朽果るりの多し貴邊六の理も迷ひらるる

あゝ可憐英雄の質を保ちながらあまの天
兆の蒼生を為すは空しく一箇忠小節
を守りて末代に笑はれんと近比笑止千万
の亂世に生逢し身を及ぶぬ迄も眞實
と補て民安んじ四海の静謐を
あもかろふへり天の叶ふ人の道
なり如く世に救ふ器を持て
しと天の背さ人違ふふ似たり
某が言葉分る過
きりや思すべしれども抑天理ありて聊私欲を
交えは願ふべく勤弁ありて詳みありと
陶の一點の淀むるく述しる竹中も胸を刺すこと

くかまひ大息繼ぎ黙然とく良の流る汗
を押拭ひ我こそ閑室に籠居しと所存あり
事なれども御邊乃為し説破さる答ふへ詞
去るがう道三入道齋藤の氏族知らざる
従ひしと不義ありとの一言最る如く似る
届ざる所なりその子細を云べし某一人の
美濃乃侍ども道三旗頭となり其の指揮
しと齋藤乃血脉あるふ因るなり其の血脉
又世人普に知らざるは事新しく言及
なれその上道三を治りしと我等も
年あく何事も知ざる比あり

大開記一編卷二

齊藤道三いまぞ長井新九郎と稱し主の土岐左
 京大夫頼藝を攻め其乃領地を奪ひ齊藤山城守
 秀龍と改姓し天文十一年めく竹中半兵衛尉
 重治の生むる天文十三年死す道三乃討死す
 弘治二年ハ重治十三歳なり
 少く事の弁へ何れとらむ道三既ふ亡む後
 道三亡むるのち義龍不従ひハ父を先主の血
 脈を以てなり義龍父殺す一と惡逆無道と
 云べ事おと毛誠を先主の血脉ふして道三乃子
 非はるの上ハ鷲山を戦ひ道三討死し義龍の意
 小何れハ勇士功を争ひ詞を取るととの遂ハ義龍

の不幸と知りしありされども養育の恩小背さ
 と天道の疾む所なるの故ハ義龍早世ハ龍興富貴
 小生長して政事ハ暗く侍の品格と見る眼目ハ
 因る國亂ハ家滅むると遠からば子房孔明の智
 事と毛是坂補佐して鎮むると能くははれ我を滅
 亡滅するハ忍むははる小遁まよつ小隱る謂あり天下
 國家の安危治亂の循環ハ於るハ某が與る所ハ
 何れハ齊藤滅び新ハ國主代り立の時死す其
 新主能民を憐る國を静謐さしり是亦隱遁閑散
 の身取るも悦の一川なりと云ふより藤吉郎忽席
 坂起る頓首御邊新主の能國家を治り民乃疾苦

城吊ひ境域の静謐を庶幾しむといふことば
此一國の蒼生の福といふへ願く早く閑居を
出づ年來心中お貯へり知の智を顯し多く我主の信
長領に多國をばく軍兵少きとゞも其心天
代りて四海の動亂鎮め太平の世とならん
宗とて併羽翼補佐の良臣之く計議談判乃謀
主なり是ふ於く弘く四方の大才賢良を招請し共
小天命を奉り天誅を行なむ日日夜夜よく
りて止む御邊の器量傳聞し懇望頻
る所より閑居の容子探り聞まはく是れ
某使として御邊何卒暫時の間織田家來り軍

畧を施し治世安民の術披露給はん
然る時々上天意に應じ下民情に協心信長の満足
其恐を少くし元來天下統一統は静謐に願ふ
心より無禮をかへり多言及べり某と
共み乃閑居を出給むは信長のみならず其ま
ぐも大慶するべしと慇懃に述べり重治笑
ぐいらく我一旦世に遁ま爰に閑居を一身のみ
む出づ織田家小仕へる強き其慕ひ弱を棄る譏を
免はば祿にむさろく厭はるるを賊徒と伍を同
くくいとるべし信長の大意をばるるを某も行く

仕官きんぐといわねむもよるに再度さくらあつるしとる
 りと云捨る奥に入替のまゝ打卧熟寐きり木下
 も力おらむを返暫く睡熟むらちみ夜も明しうげ今
 一度竹中み對面さんとわりへど重治起出ざり
 ふよりかの小童み暇を告て洲の股へ歸り大澤次
 郎左衛門を招き竹中と問答せし始終物語りか
 洗鉄石心居り動き出さばよき塩合ぬるべし貴
 邊今より彼處ふ赴き此間申せし旨を以て計らひ
 玉へさゆらばかたより爰み來るべしと云みより大澤
 次とやうくまを城領掌し一兩日を過し次郎左
 衛門壹人竹中が閑居み到了案内とす不どと重治

毛珍らしくかひひ呼入奥の間み請いて對面を然
 る小大澤の顔色蒼然としていと愁をいさ体小
 て竹中さむひ今日某爰み來りしと日此の疎遠
 を謝らるるさうりハハ別之頼申度とありと
 此故ありと申けさむ竹中何事ぞと其の子細問
 小大澤いさ某さばく齋藤龍興ぬし其諫しか
 ど龍興さむ其用ひさ却て某を疑心終み斧鉞
 乃誅を加ふんと謀らば由告知さるるのゆゑ
 より居城み引籠り世の形り行を見合を居しし
 弟主水さむり織田家ふ仕官し莫大の恩被む
 る因き某さむり信長の所行を聞らば尋

常の弓取りは必^ひ定^{じやう}天下^{てんか}に旗頭^{はたかぶ}と^なるべ^べき氣^き
質^{しつ}と知^ちる^る加^か之^の弟^{あに}は^なり^りも^もあ^ある^るゆ^ゆり^り一^い度^ど
信^{のぶ}長^{なが}は^は相^あ看^みし^しの^の雄^{ゆう}風^{ふう}と^と同^{どう}じ^じに^に當^あ國^{こく}洲^{しゅう}の^の股^{また}
乃^{すなは}要^よ害^{がい}は^は住^すま^まる^る木^{きの}下^の藤^{ふじ}吉^{きち}郎^{らう}秀^{ひで}吉^{きち}は^は面^{めん}會^{かい}し^しの^の事^{こと}
談^{だん}ぢ^ぢる^る秀^{ひで}吉^{きち}厚^{あつ}く^くり^りて^てる^る清^{きよ}洲^{しゅう}は^は同^{どう}道^{どう}と^と
了^{りやう}して^て信^{のぶ}長^{なが}も^も出^い會^{かい}は^は頗^なる^る懇^{こん}意^いあり^りい^いの^のね^ねる^る
と^とも^もや^や某^{なれ}と^と害^{がい}を^をな^なす^す由^{よし}内^{うち}に^に支^し度^ど有^あり^りを^を藤^{ふじ}吉^{きち}郎^{らう}探^{たん}り^り知^ち
て^て其^{その}事^{こと}と^とも^も延^{ひの}び^びて^て今^{けふ}日^ひ迄^{いた}は^はり^りて^て有^あり^り弓^{ゆみ}矢^や取^と身^みの^の
人^{ひと}み^み疑^うは^はれ^れ死^し城^{じやう}怖^{おそ}き^き身^みを^を退^ひぞ^ぞし^しむ^むる^ると^と末^{すえ}代^{だい}迄^{いた}乃^{すなは}
汚^か名^なあり^り速^{すみ}に^に腹^{はら}を^を切^きんと^とし^して^て秀^{ひで}吉^{きち}も^も又^{また}共^{とも}に^に腹^{はら}切^きんと^と
し^して^て忠^{ちゆう}なり^りて^て罪^{つみ}なき^き秀^{ひで}吉^{きち}城^{じやう}犬^{いぬ}死^しさせ^せんと^とも^も不^ふ便^{べん}

如何^{いか}も^もせ^せば^ば兩^{りゆう}人^{にん}無^む事^じは^は恥^ち辱^{じやく}なき^き様^{よう}形^{けい}な^なる^るべ^べきと^と
工夫^{くわふ}と^とも^も後^{のち}に^に信^{のぶ}長^{なが}貴^き邊^{へん}と^と懇^{こん}望^{ぼう}久^くし^しと^と聞^きき^きて^て貴^き
邊^{へん}城^{じやう}勸^かめ^め味^{あじ}方^{かた}と^とな^なり^りて^て信^{のぶ}長^{なが}の^の見^み參^{さん}入^にり^りて^て
を^を兩^{りゆう}人^{にん}と^とも^も罪^{つみ}城^{じやう}の^の道^{みち}を^を開^ひく^くな^なり^りて^て乃^{すなは}と^とも^もな^なる^る
乃^{すなは}と^とも^も參^{さん}向^{かう}せ^せり^り國^{こく}の^の安^{あん}危^き世^よ乃^{すなは}興^{きやう}廢^{はい}なき^きや^や我^{われ}
等^らが^がい^いふ^ふべ^べき^き分^{ぶん}は^はあ^ある^る龍^{りゆう}興^{きやう}は^は無^む道^{だう}な^なり^りて^て
不^ふ義^ぎ殘^{ざん}忍^{にん}なき^き世^よに^にあ^ある^る天^{てん}誅^{しゆう}踵^{しゆう}を^をめ^めく^く
ら^らは^は間^まに^にあ^ある^る美^み濃^{のう}は^は諸^{しよ}侍^じ中^{ちゆう}何^{なに}も^もあ^あり^りひ^ひま^まな^な
を^を見^み林^{りん}の^の甲^{かう}斐^ひり^りる^るも^もな^なり^り國^{こく}民^{みん}の^の志^しは^はわ^わる^る處^{ところ}
を^を見^み清^{せい}洲^{しゅう}の^の政^{せい}道^{だう}も^も何^{なに}國^{こく}も^もむ^むして^て
是^{こゝ}に^に寛^{かん}仁^{にん}し^して^て大^{たい}量^{りやう}を^をな^なす^す誰^{たれ}も^もは^はあ^ある^るは^はな^なり^りや^や

亡國の旗下に犬死せんとも無念あるべし有
道の風靡らんとすなり疑惑の難ありき身の置
処なり貴邊を年来入魂乃朋友あり我為み一度信
長を面會する人さうバ我等が身も安穩みその上
を助命の厚恩忘るべし殺活とも御邊乃心一
はみありと又余義をなく中をいほど竹中少将
おや打笑ひ是全く秀吉の謀るべしとの比藤吉郎
羨み來りて我を清洲へ赴けよと勧めしあども隨
りて故御邊に使として再應の弁舌を動かして我
を誘引せんとす然れども我を去りて羨み閑居し
弓矢乃道に棄り今更何として織田家お仕ふべ

や弱城を去り強み附廢を去り興み赴く輕薄楚
忽に輩と日城同くして云々をいりて故御邊乃
頼中さう處にはるごとけがら我心既み決定せり秀
吉乃をりて遊説するのみよとけり色々の大澤又
の様御邊に宣ふ處道理に似き道理に似き信
長を仕官し玉へといひみわあは只一度信長を見
参りてつとりのめり御邊一度信長を見参り玉
るまのの大澤と秀吉の身命無事なるのみ那ら
美濃尾張河内百姓の幸なるを然る代仕官して
る臆病不義なりと乃了簡御邊に似合しから
身を殺して仁をなほと申本文あり恥を厭はば身

大問已二編卷一

を捨てるも民救ひ國安んずるは仁心仁智也
 危云へは斯くの某命を惜み辭はくして御邊城
 勸り死を遁まんとする小似しも全くそのさち
 と思ひやへり信長我等を疑ふそ用ひざるは
 みみく事濟ば清洲も腹切て別心をなきは顯は
 んと至る安し但さるる齊藤家の諸士織田家
 属さんとありし心ありとも又疑惑乃ち命を棄
 んと我慮る降参の念を断る諸士降参乃念
 城断るは龍興を援けんとすも此をゆるは
 然らば國中合戦の衝とありて民一日も安穩な
 るはどさる亂軍の際に齊藤家の氏族とどく打

死は譜代乃名家をもち断絶さるは神歎
 乃最大なるものなりやと云うたれ某命保ち
 信長乃疑心を散らせの旗の手は属しなぞ齊藤滅
 亡の期も臨み奇計設けその血脉乃相續をせしめ
 るべしあは齊藤も叛くも似て却る齊藤のさちふ
 るを処とつべし彼是を勘弁し御邊城申勸し
 聞入るまはぬとさると心得しとふみより竹中
 毛漸らんとみ心まとい如何もまじとありける顔色
 又らるみより大澤をさるみ理を盡し勸けき竹中も
 心酔るが如くみより大澤ふ向ひ貴邊朋友の好をも
 はく我も勸めらるる處を乃理明しさいさをも透間は

但我世上の祿を貪つて義を疎と輩とひとしく沙汰を
らまんとて我無念存ざるはまのく此閑居を出とと
誓ひしを今御邊のいせり齋藤血脉存亡の謀み付
く聊所存有り依て織田家み降参するみ及み信
長み見参のくみく御邊乃身のくみふまういせり如く
齋藤家亡びんとする時み我をその子孫に立くこの家
乃筋目が續けりゆべとるまらば日比の意地と棄てると
向をなす御邊まのりく秀吉と談ども我猶又工夫を
なすといふより次郎左衛門大み悦び何さぬ秀吉と談
く其謀が定むる御邊まのり意が違ふは某が再度
まら来るを待のくと固く契約して大澤と洲の股へ歸り

秀吉みくると告ぐか秀吉手を打て喜び最早竹中も幕中
乃實となきり然るも尋常乃とくみて来ると我と
御邊と諸共み彼處ふり竹中が心中を安くなして同道
まらと密談し翌日ゆび大澤秀吉打連く竹中が閑
居み赴き重治小對面し先日某貴所と問答しゆると整
まらみより心鬱くとくしたのくは洲の股み歸り
一処大澤氏来りて清洲も同伴し信長み見参せしめよと
いふゆきみより急ぎ次郎左衛門と共み清洲へ行向ひくや
中入りに信長疑くまらとて大澤を殺さんとほる氣
色は某とやく悟り大澤と共み洲の股ふり種々工夫
まら大澤御邊と入魂の故を以て勧め中まら得心

大澤記二編卷十一

りりー由某等が活命の恩のこぼりぬ尾濃兩國の民乃
大慶とつゞく織田家も降参しつゝありぬ御邊の本
意感入る右より某別小御頼中居る一糸りり聞
入る之とら御覽は如く某も弱年とつひ才能共み
人並るはば一城を預り居ることをとらざる過分とつひ
さば寢食安くさびしてこれをおりども又多事み
して行届る願もくは乃閑室は洲の股小移しつひ大小
事教諭を蒙りて然らば貴邊降参の名もさくし
又信長の本望も達し大悦極まらるべしと申すは重治
莞尔と打笑ひ某御邊のその詞を待たりし果して今
爰及べり先日とらめり會さし時種も説破さるる

理哉思惟して心中さう穩しぬぬ大澤来りて其の
餘論み及ぶ但その詞も國民の安危と齋藤血脉を相續を
しむる計策は迷はれ又我心中も疑惑せし処ありしが
大澤と御邊と心合はるる此事を整めはるる某
は於るも大幸とほる処あり某短才愚蒙ありとつひと
聊學得し処は以て御邊乃らみ洲の股に赴らば信長も回
謁をさるる憚りとねり
流布本重治の詞も我才浅く愚痴ありとつひと年長ず
るは乃ら御邊の寄親となり洲の股に赴らばとあり但
竹中半兵衛尉重治は天文七年六月十二日播州陣中歿す卒
後三十六歳とつひ天文十三年甲辰の生きたり木下より

八歳年ころ因て年長なる城のりくと云を取らば
又降参といひみはりしほど閑居城出く世の人み交ると本意
さう次去るう齋藤家相續のころ國民安隱の事免汚名と
顧貴邊乃勸誘み従ふ処る行ば齋藤家滅亡の時至ると
何卒寸志城施し憐愍を加えんとといふ木下大み喜ひそのと
み於く其が寸功み代く取成すさるう少も氣遣ひ耶く
安堵するといふと堅く約束せしかば竹中もほく悦び速み
閑居の地城出く木下大澤と打連洲の股へを移りて
齋藤右兵衛大夫龍興の治部大輔義龍の嫡子ふして義龍
を又道三を弑し者多りさる不孝の義龍み竹中城始り
美濃の諸士の隨ふと其故あきばさるうとくは美濃國の

守護ハ土岐左京大夫頼藝とく美濃守頼光より以来十七代相
傳の惣領職さるう又厚見郡稻葉山の城主齋藤越前守といふ
ハ鳥羽院の御時より相承せし當國の目代職さるう其齋藤
乃庶子と長井豊後守利隆といふものりり利隆後みハ齋藤
といふ利隆の弟城一乘院日運上人とく京の妙覺寺に在るが
後みハ當國革手の常在寺み住日運上人の兄弟子と法運
坊と云し者墮落して松波庄五郎と改め油賣とさるう日運上
人をたうり美濃國み来りて城豊後守利隆一目見て又その
者とおりの種み取るや遂に利隆の家老西村三郎左衛門
尉が遺蹟を嗣き西村勘九郎と称し出頭さるう後より
利隆夫婦を弑しその家城奪ひ長井新九郎と改め惣領職を

土岐頼藝とぎよりよし親ちか附つ又江州佐えいしゅうさ木き下したとと援えんとと如ごと左近大さこんの
夫おとこままのの山城守秀龍やましろのしゆりゆうとともものの頼藝よりよしとと責せ美濃國みのくにと
追出おひだししのの妻つま三芳さんほう城じやう奪うばふふ三芳さんほうがが産う男子おとこととももちち義龍也よしのり
義龍山城守秀龍乃許よしのりやましろのしゆりゆうのゆるみ生長みせいちやうままもも實じつハ土岐頼藝とぎよりよし子こ
たるたをを以も美濃國中みのくにちゆうの諸士しよしああれれをを崇敬そんけいして道みち三城さんじやう殺ころせ
ししをを罪つみをを次つぎ却かへるるのの旗はた下したみみ随ず逐じゆくささりり此この次つぎ弟あに流なが布ふ
本もと記きをを処ところ誤まちが多おほしし今いま委まかくく改か正せいをを

重修真書太閤記二編卷之十一終

重修真書太閤記二編卷之十二

竹中重治秀吉たけなかしげちるひでよりの寄親よりちやととなな事こと

并ひら信長のぶなが稻葉いなは山城下出張やましろしたしやうちやうの事こと

木下きのした秀吉しげちる智慧ちえ弁舌べんごをを以も竹中半兵衛たけなかはんべゑの心こころをを動うごし

せのせうち大澤おほさわ使つかひとして理順りじゆんをを説とううとと叔おに自身みづかみ再また度たび

行向ゆきむかひひ慇懃いんしんみみ應接おうげつししけけふ重治しげちる終つひみみ其理そのことわりみみ伏ふ栗原くりはら

の閑居ひまとと出でくく木下きのしたとと共ともみみ洲すの股また乃すなは城中じやうちゆうみみ来きりり秀しゆ

吉喜悅きちぎやく限かぎりり尊たう崇そう譬へい取とりり使者しやとと清洲せいしゆう

み遣つかりり竹中半兵衛たけなかはんべゑ重治しげちる一旦いつたん世よとと道みちをを山林さんりん閑居ひませ

ししとととと大澤おほさわ次郎じらう左衛門ざゑもん計畧けいりやくみみ味方あじかたみみ帰順きじゆん

洲の股乃城中み入来依る委細ふ應對してその説を
 聞その理致勘弁仕るみ實も聞し其違ふは當代名譽
 の軍師よして御下知次第相伴ひ糸上仕るべき由言止を
 しかば信長斜もは悦びひ竹中が味方み属はる事
 近比本望に至りより急ぎ召連來るべし早に對面はる
 及こよの仰らるるみより使者立返り斯と申とば
 藤吉郎即竹中み其のうに告むは重治も異儀及及を
 次盟約の通し御邊のこりみ謀主とあるべしその旨は
 言上りてはしかるべしと申ふより木下その意は得
 大澤次郎左衛門もも同道して清洲に至り案内はしを
 しかば信長對面の威儀を繕ひ竹中を召出さるはけるり

秀吉先づ御前み進み美濃國乃大澤次郎左衛門御
 味方み加るは以て同道仕り御目見をせり一處御意は
 叶はば切腹させし御下知は蒙りは然し然し
 是も小腹切をいふ此後誰りの御旗下み降りぬべきは
 川々我君乃御鋒先の弱とありぬとら私の計策は
 以て御意を返しはいと深く恐入るはぬと終り我君
 乃御為とありぬ御免を蒙りやと存し一川乃
 勲功の立は様みと申勸めしは即竹中が勸めし閑
 居を出させ伴ひはとては他は竹中が御味方と知り
 信長は全くと大澤が力みしはは大澤を御免はしとて
 信長は速に次郎左衛門を召出さるは我先み

其方と疑ひ竊く殺さんとさし藤吉郎伺ひ知くその
 方乃身とたがひ一命全くなさしめ其方我を恨み
 恨却て我為し心労し竹中を勧め味方とせしと
 天晴の大功感さるふ餘り然れ本領安堵の中迄も
 猶此後忠節の上は加恩の計らひあざりと懇みやされ
 しかば大澤も最前みことかろう格別の懇志と悦益信
 長乃心中を頼母しくおのひたり諸重治召さるに
 下藤吉郎と添く信長乃前さう美濃國の竹中某と
 披露さしけし信長座とさし初く面會さし由
 演ら北次み久しくその英名聞き朝暮懇望の志ゆ
 うとことし開散の隠士たり見参さし便を得て遺

恨やるうとさうりし計らば爰来らうと信長一期の
 悦び此上あさうり急ぎ本領安堵さし軍務を
 處置らるゝと有し時重治承り短才愚癡の某度御
 招みらりりりりと面目身おぼさう辱仕合ふ尤
 とくみ参上仕り御禮やべしと思召さるへくは世
 道まて雲水閑散の身と罷成萬事疎懶と暮らして
 是ひさう遅参の処今度大澤次郎左衛門いすら利害
 解かり君乃寛仁大度おぼさし由出濃尾兩國の
 民安く耕作の道ひけ太平の春はむと理を喻し
 了此頃乃鬱念を散らし洲の股に罷越さる木下藤
 吉郎参上乃序は君乃御禮やとよと勧めり参

向仕くはへも御奉公のこゝに恐ろしく御免蒙り度は隠
 遁閑散乃身本領と安堵仕るべし道も形くは上と但此もみ
 洲の股へ帰し給うるはとて我願ひ奉るとやうなみより織田殿
 いさう不快の氣色なりき藤吉郎もこゝ座敷をくめ重治
 いまぞ隱遁の志を改めやとて栗原の閑室は洲の股に移しや
 さうくもくはへと別の御扶助も及やとて元より棄れ本
 領は再度安堵とて道理もねたはるは竹中が心と任さ
 へくさく又君乃御旗の手と天下打靡さへし時と何れと
 こも閑散の糧料は寄附も被下はると重治いふと否やと
 と御取合せしは織田殿も悦喜かざりけり重治も眞の武
 士とよべ一旦乃恩義はわりとて鉄石乃心腸を改めさる

と今もその表裏乃侍と同日みかるといふ人みあはれいふも
 所望乃如く洲の股へ閑居して藤吉郎は教導行ふべしと仰
 出されしは竹中も謹く仰かへありきなりぬいりぬも上
 意の如く洲の股へ蟄居仕り愚なるまはれ思得しとて
 ひく藤吉郎と相談仕るるさめていと御請やせしり
 より藤吉郎も難有ちひは啓して兩人退出し時と織田
 殿大澤竹中が厚くさくけりしひ見衆はさるしり
 せく様も乃引出さるの残るさくけりし暇賜さるしり
 より三人うち連洲乃股へをめぐりける
 流布本重治乃問答いさう盡はれは知れり今一本
 みよりと改正次は重治の織田殿に從へる年紀も

いささか不審なるにふりて後其詳を説く

あまみ於て大澤を以て故郷と居城鶴沼に安堵し木下竹中
洲の股を歸り暇を以て兵法軍談を明しくし油断なく
兵隊練りて機を勤之し木下乃士卒銳氣日比十倍
くどくどみたり是れ其の譬ふれば龍乃雲を起し虎の風
を従ふが如く是れ其の比ふれば百姓を安んじ耕作を勤
しめりてふりて近郷近隣乃農人をも鋤鋤を擔げ妻子を
むと具し洲の股領へ引移りけるみぢ一尺乃地も空しめ
けりの上其年貢平均し民と地頭と其の力同しくは
けるみより元より齋藤家乃悪政をどうとみ誰れかの君
亡るべく善政を施し我より父母妻子に安樂をなすべし

は下とすまじし所なる洲の股領乃民を朝夕みとの負はし
けるふりて兵糧軍用山乃如く積りてり其れは算勘取
らふみとや二万五六千石に及べり木下多年の智謀一時不
けりて一城乃主として其れ所領切む後けいよく
仁政を施し其に暇なく年々永祿六年に成り
竹中重治生年十九歳稻葉山乃城を襲ひ龍興に追出
自本城を住しけること永祿五年三月八日の夜の事なり
織田殿のいと其間をひそに城を奪ひてり其れ
美濃國半分竹中を賜ふことなり其れは重治我國の
城は他國の人を以てすんと本意ありはとつひのり一
年其れを城を龍興みかるとり然れど重治乃隱遁を

永祿六年の事あり其の書は説いさう齟齬さうが如く
但永祿六年の木下藤吉郎廿八歳竹中重治廿歳織田殿三
十歳の時あり

織田殿は其の年比濃州に切從へんとおのりて北度に出馬の
りは是れも毛さしとて毛さく士卒大河之損とて
患ひ多し足溜のころ洲の股の要害に築き木下と大將
として是れ乃あさうを打從へはとひらみさう大澤
竹中味方之属をころば時々是れ早濃州をころ崩
し日比乃思ひはんと洲の股へ下知せられしに
藤吉郎うけとまわりいさう時節とやくの今さう御待
りてと諫けるふより織田殿も止とて得玉とて十

餘日伐過し一むひ一がとかく早打出く其れ勝利あり
さうさ木下み沙汰とせとや出陣とてと競みさう
三月十二日八千餘騎引卒東美濃へ出馬あり

永祿六年三月十二日美濃出陣の事織田家譜并之豊臣
譜太閤記等と載せはるる於て是れ齋藤家記日根野
系圖等とをのり粗見へり因て今これ後
稻葉山より牧村牛之助長井隼人日根野備中守同彌
次右衛門四人乃大將分とせ向と駈ちとせべし
日根野兄弟はわのく一千餘人の武者引卒一半途
埋伏し合圖伐まらちや齋藤九郎左衛
門長井飛彈守兩人と二十餘騎とて飯乃伏兵と

大隈記二編卷十二
り牧村と長井隼人と五千餘騎は丸不備えく
織田勢と争うるを定りしから尾州乃先
鋒池田勝三郎坂井右近が二千餘騎とて合せ
火花はちりて戦へば森三左衛門可成佐之内蔵
助二陣乃身とありて潮乃よく如く進ける処へ
此戰場は新加納の原ありとつり野中より大
小津古冢三十四五存せり慶長五年乃戰場もま
と此とあるはかきども岐阜勢古冢城楯之仕寄
設けしといふ説あるは慶長五年とて或はち
古冢のつりしとあるべし
長井飛弾守齋藤九郎左衛門が一千餘騎横合たり

攻立しやい形や敗軍せし牧村長井とつりて
搦よりや駈けるみより坂井池田も午よりあり
必死とありしはたつり森と佐に馳走をせられ
伐助も攻めし敵の大軍とてしかも土地乃
案内者あり味方と四五里の道に寄るなり今朝よ
る乃軍之疲をとり既に危ふくみへば織田殿
御覽し先鋒とすはけやものとも横合より駈
寄し伏兵に追はるる下知ありしは不ぞ茶田
権六郎前田孫四郎二千餘騎とて馳出し先鋒と一
川ぬき勇を振へば齋藤方叶とてやあひ
たり右往左往と散乱す池田も坂井も其後之氣を

得て立ち入り一足毛むくま進めと勝之乃を織田殿
乃旗本三千餘騎をわさどく續く段之押出
しつひかり日根野兄弟の圍之尾張勢はひき
よと時分はりと左の方より備中守右の方より
彌次右衛門の鐘先は織田殿
乃旗本へ突くは尾張方ふかふかと伏勢を備
えしこととつねに覺悟せざりしかばゆき騒
ぎ隊伍を崩し狼狽けるを日根野兄弟
士卒はげおし寄来るを大將信長あるぞ
あれを討取ずばいのち命はかきべきか
れやくと大音ふとつり短兵急之攻立るほど

織田殿もすく驚きこのひ敵我も知る手はく
寄つりいうみして切崩しと思案するも
日根野の軍勢をひきくと取まり尾張勢乃後よ
り攻め入り尾州勢いよく途次失ひ事をぞ
難儀み及びたり柴田と前田を後陣乃関の聲を聞
て大急ぎ引返して旗本は援もんとて処へ誰と
を志すは一手乃軍勢をひきくと馳出柴田前
田はささり留りあれを西美濃乃三人衆と
みれ稲葉伊豫守あり
稲葉伊豫守貞通今年四十八歳塩塵入道乃末子
あつとつり長良の崇福寺の喝食つりが父

兄討死を後還俗して家督を継ぎしより
日根野兄弟を稲葉乃加勢といふ勇と美濃尾張
乃合戦たゞ再舉はりと採立しつゝその外運を西
端にわたりひらき見物して居りし國人も稲
葉乃加勢に決定あり無二無三み突りし織田方の
引分は聞えり勇士をたれども八十餘騎を三所
引分は馳合と自由あり日根野兄弟を只一
所に駈よせし信長を討ふときむしく攻めしり
織田殿もいよるにれはれは思ひ切りの
所右乃方より一午の軍兵馬烟が立ち馳来
る尾州勢は北と稲葉一人とみ大敵あるよし

荒手戦何として防く處と恐怖のこりあり
其件乃軍勢間近なる中と勢戦二手引
しけ一手は織田殿の旗本がけ齊藤勢の後よ
り面もふり切切かり一手は牧村長井を勢に
討つゝ勢猛とむひしその中より大将とみ不
しきかまり先に進む大音のあつ洲の股み砦を築
き木下藤吉郎秀吉只今主君乃御迎しよる路
次に出會ふ妨をすりのみは不當をよめやのみ
切くばし大将戦迎へ来るに呼ぶつ
川鎗乃穂先を拵けし突かす尾州勢は味
方乃加勢と力を得る獅子奮迅の勢をよる日根

野兄弟をわりのい毛わけぬ荒手の勇士も突く門を
乳左右へまのりと逃走す秀吉もまの少くも目次
のち中織田殿乃旗本へ進み参りけき織田殿を
るかり御覽にはあき今日乃合戦楚忽ふ討めり
敵乃伏兵の出會味方頗難儀乃死いしくも援兵
得く忽く勝利を得り是全く汝が忠勇みり此
但先鋒乃將士心元なりと宣へ秀吉其義更之御
機遣之及びはま先程ひきつけ某が一手乃勢
み土民等汝が加へ凡一万餘人先鋒乃美濃勢
汝突く川させりくばはるく勝利乃便宜ひと
とり言葉のりより柴田前田虎口の難儀遁を

隊伍整へ引返さ中ふも前田孫四郎利家鎧下
首三太刀首五持さうりく實檢み入る織田殿御覽
汝が武勇跡く福ど毛今日も味方敗走し合
戦尤難儀乃死その身恙なく引取しとみ手ぐり那
るみ敵八人討しと鬼神も増まり但如何み
く左程乃仕合戦得しと尋まへとさし御旗本の
軍不意み起りしとみては速み引返さしとさし
ひ死汝稻葉伊豫守の荒手之遮り止られ合戦近比
難義みくの処へ木下組乃蜂須賀稲田三千餘騎
をさし雑兵六七千餘人稻葉が後戦とり切人とさ
し故稻葉かまは引退さし元より稲葉をよの

合戦援ふ心もあつくはひし日根野に頼まれば止
と成得ば出陣せしとみえ中ひと言上し織田
人数引上しとみえ中ひと言上し織田
殿木下が計策今みえとめねしはみえり機變乃理天
道み通せしこと甘んじり扱ふと池田坂井森佐
佐が革重地み入る大敵と戦ひ居りし木下が
手の浅野彌兵衛大澤主水青山新七加治田隼人等
六千餘人左右より押寄るみより齋藤勢大さか
ゆるぎ前後みえし散乱は去れし力成得し池
田坂井も一同み難く勢成すとえし歸りし
織田殿ますし甘んじり味方乃人数成か

とくあはば討死三百餘人手負五百餘人と聞え
りあれは度乃合戦勝敗を取みして一定せ
し程難義は軍せしと照く大将も既し危
ふりし戦事故なく歸陣せしと全木下り援兵乃
圖み當りし故ありと悦喜さくさく諸勢成休
洲乃股の城中み入御ししと志さく諸勢成休
息せしと
信長清洲へ歸陣乃事
并秀吉父母親類招請乃事
織田殿秀吉り諫成さみ刺木下み沙汰さく濃洲
み出馬し稻葉山城下まきさくさくは敵

用意ありて味方難義及ひ織田殿既危かりし時秀吉
吉くやく馳付救へ故無事九州の股に引入るひはきど
毛さすら秀吉が手前面目なくやわぼくもさ北ん又
宣ひ出る言葉もはし秀吉様、饗應せりし後やもは
稻葉山乃龍興の取み足ざる闇愚蒙味乃侍なきもを
の家人郎等も剛勇智謀の輩なり殊更西美濃の三人衆
とよま孔うる氏家稻葉安藤などつゝまの旗下みく日
比ら龍興と疎遠なるふ似とせども時として遁れが
たさ由緒もゆるやめり今日乃如く加勢に出くはし
彼等式さの恐くもいれはつゝも當國累
代乃兵士も一國中乃名家といひ一族門葉廣くは

彼等旗色はみくもこ靡る後ふ者多くいを以て日
根野兄弟も謀みく今度も稻葉を頼と見くはつれを
乃の共味方招きいれ美濃國の地侍を召く
當方へ歸伏しいづさもいれ龍興一人いれ猛い共
防戦乃方便は失ひ落城の期遠りるましくはたさ
と枝はわろくこのち幹を伐根は掘棄てを乃草を
絶しゆもふくぬるちをきり力攻め攻させ
よひも多く乃士卒は損しつれ乃效はよしと
ちけるみりり織田殿も北さるる随分謀はつれ
ふも木下が方寸も任せらるる隨分謀はつれ
三人衆は説く降参させいと宣ひさく御勢は清

大隅記一編卷十二
洲へ入らば木下り音信待りよ藤吉郎をいふも
して三人衆を味方引入んと計畧工夫しけるが
ゆゑくんと計らんふ如きとわひひますく濃州
乃百姓等み仁恵哉施し洲の股領へもせ集る様み
那しける元より虐政之困窮を其の共好まは
一人洲乃股之赴き二人は三人四人五人十人
一村慕へも一郷靡き鋤鋏をくも幼雅哉携へく
居を移るも日夜引毛くは實も民の慕ふ処天
おれふ與ふ不理をく次第くみ洲の股繁昌し
もあふりより篤實清廉乃其の代官と
一村一郷乃仕置哉司とせ根をくくする謀を專

みましくは美濃國十八郡乃内六郡のつり木
下乃領となきり
美濃國今を廿一郡昔は十八郡みく不破石津多
藝安八池田大野席田本巢方縣厚見各務山縣武
儀郡上加茂可児土岐惠奈あり天正十二年尾州
葉栗中島海西三郡の地代割て美濃み隸終り廿
一郡とりみ洲乃股の安八郡あり今いもる六部
ハ石津多藝不破池田大野安八あり
抑民を國の本本固らば未安しとりみ理代明ら
めらまける心乃底をたのりもあれやうに敵國乃
民父母も慕ふが如く我もくと来帰するも木下熟あり

けるやう我故郷出くはる國々を遍歴偶仕宦
の身とありて父母の國に住まが奉公大事件にて
父母を眷顧暇なかりし今かく一城乃主とあり六郡
民乃其民けえとく世も安くありて小所生の
母はより親しきとての城迎取て孝養乃力盡はれど
やとあり後付浅野を使節として尾州中村へはりて
浅野速み尾州と赴き木下の親しき人々を尋出
てかく墨股へ御越りて路次乃用途をの外すと
この雑事乃と為黄金あまの城をたの上浅野が
承み中村より墨股も七里餘乃宿ぐみ休所を志
川らに万差支なくとり賄ひたり

中村より清洲へ出稻葉秋原起城過く木曾川城
は美濃國形り大浦一色川口乃村へ城經て
長良川の下流城々は行程今道も清洲より
六里あり
木下は母と六年以前別居せしむ對面せしとも
なく朝暮あひ居る處へは協便宜城聞々
は悦び勇々塔の彌助をたし若小一郎城より妹乃
朝日鍛冶の五郎助打とて洲乃股へ来り設乃座
敷みはさふあり
木下乃母天瑞寺大夫人永祿六年五十歳木下乃
姉瑞龍寺夫人今年三十歳小一郎秀長廿四歳朝

日娘廿一歳と知るに竹阿彌を朝日娘の生れ
天文十二年の夏死せしと云は今年ハ無人なは
しと云ふも書寫山十地坊の過去帳に天文廿
二年四月廿五日道園禪室秀吉外祖と云ふ天瑞
寺夫人の父を今と云ふ人なりしと云ふ
木下敵國は去の城城たやましく打出るさしゆりねど
近きほど迄も迎み出ると云く居るが待付しと
怠りなると君み仕ふる身乃勤あると云ふの
山みもと海よりさうして心の揺るがらりては
そのち親しれりゆりゆり呼ぶるに察らるる
上りの月もさくも此城中に置奉り朝夕に見えし見

を海いらせと云はれども其の城も秀吉が居所みり
ら次當國城打とる處を方便に築くる足溜り乃城あり
を時として軍勢城中に充滿し其の敵乃寄るる
合戦城いとむと云はれり一日庁時を安穩に暮
し心地をせほし尾州に某り居所ハ大将乃城の内
みして勿く穩しと云ふ只今より彼處に移せ玉
ひく御心安くまははれり彌助小一郎二人ハ
當城に止りし程に從ひ働かると云ひ母姉妹
その餘の親族をばまきと清洲へ送り遣はるる後
浅野蜂須賀二人が使として母姉以下城墨股へ
り各一晝夜のはと饗應し終り清洲乃居所へ送り返

大岡言一傳卷之二
姉夫と弟残し止りし由落毛昭く言上あつりしを
織田殿あもその孝心を感しむひしと木下乃母好し
くもて姫之面會あしけるこ心を擾しく容さく美
しうりき互の志浅く日み添むはしく居諸は
送りけり織田殿も時として衣服調度などを賜
りて母が心慰めむひしほどに當殿の故備後守殿
ふ生を增りし大將りふと感心してお語合ける
木下乃室家高臺寺殿今年十五歳あり
墨朕み木下小一郎長尾彌助二人の兵士増けり
りしは毛竹中代師として兵法代学ひあつり器用は
て日ぐみ上達しけむ末の迄くわひてあはれ扶

持し鍛治五郎助が子虎之助今年二歳ふれども
大柄あつり力はよく四五歳ふりしは是れ凡人邪
らけ末ぐ我腹心とあふさるゝのこして清洲へ送り養育
としりたり
流布本は虎之助六歳とあはれも誤りたり清
正神儀を永祿五年壬戌六月廿四日丁丑日誕生たり
秀吉公の生れむひし中村の人あつりその家も
相近くあり今正脱山妙行寺とつり日蓮派の梵刹は
その家乃跡ありとつり

重修真書太閤記二編卷之十二終

大岡言一傳卷之十二

十六

